

歴史に学ぶ

大阪経済大学特命教授・
経済評論家

岡田晃

第五十八回

軟弱イメージの今川義元いまがわよしもとは実は優れた戦国大名だった！

今川義元と言えば、桶狭間の戦いで織田信長に討ち取られた武將として有名だ。時代劇では、義元が薄化粧とお歯黒をして輿に乗っている姿や信長軍に襲撃されて慌てふためく様子が描かれ、「軟弱」といったイメージが強い。だが本当にそうだったのだろうか。

実力で勝ち取った今川氏当主の座 積極外交で、武田・北条と同盟

義元は一五二九年、今川氏の当主・氏親うじちかの五男（三男、四男説も）として生まれた。今川氏は足利將軍家の一門で、駿河や遠江の守護を代々つとめる名門の家柄だ。それゆえ家督争いを避けるためか、嫡男など後継候補以外の男子は出家させることが慣例となっており、義元も四歳または五歳で仏門に入れられた。

その数年後に父・氏親が亡くなり、長兄の氏輝うじてるが家督を継いだ。だが、その氏輝も二十四歳の若さで亡くなった。このため、十八歳になっていた義元

に家督継承権が回ってきて還俗した（義元の名はこの時に名乗ったもの）。

これに対し一部の有力家臣が、やはり僧となっていた義元の異母兄を擁立して反旗を翻し内乱となった（花倉の乱）。だが義元は勝利し、家督相続を果たす（一五三六年）。「軟弱」どころか、自らの力で当主の座を勝ち取ったのである。

駿河・遠江の支配体制を確立した若き戦国大名は、外交・軍事・内政の各分野でさつきく実力を発揮していく。

翌年、隣国・甲斐の武田氏と同盟を結び、武田信虎（信玄の父）の娘を自分の正室に迎える。その後、武田家では信玄が父・信虎を駿河に追放し家督を継ぐという事件が発生した。義元は、信虎を丁重に引き取ると同時に、信玄とも同盟関係を継続するという外交手腕を見せている。

その代わり、盟友だった関東の北条氏とは関係が悪化してしまった。義元の父・氏親の母親（つまり義元の祖母）は関東北条氏の創始者・北条早

雲の妹または姉で、両氏は親戚でもあった。その北条氏は武田氏と対立していたため、今川と武田の同盟締結に怒ったのだ。一時は戦火も交えた。だが義元は時間をかけて北条氏との関係修復にこぎつけ、武田・北条・今川の「甲相駿三國同盟」を締結するに至る（一五五四年）。

このように北の武田氏・東の北条氏という強大な相手と時には戦いつつ外交で成果を上げたわけだが、これと並行して西に接する三河への浸透も図った。当時の三河は国人が割拠していたが、そのうちで有力だった岡崎城主・松平広忠を今川に帰属させることに成功し、広忠の嫡男・竹千代（後の徳川家康）を人質として駿府（現在の静岡市）に送ることになった。

ところが、三河への勢力拡大を狙っていた尾張の織田信秀（信長の父）に、竹千代を奪われてしまう。そこで今川軍は三河の織田方の城を攻めて、信長の異母兄・信広を捕らえ、竹千代と信広の人質交換を実現した。竹千代は以後十年以上に

わたり駿府で人質生活を送ることになる。

この三河での一連の戦で今川軍は織田をしのぐ強さを見せ、ついに三河全域をほぼ手中に収めることに成功した。

金山開発と新技術導入、経営基盤強化と成長戦略を推進

義元はこの間、内政でも手腕を見せていた。まず花倉の乱に勝利し家督を継いだその年のうちに、早くも検地を開始した。領内の隅々にまで支配権を確立させると同時に、年貢収入増加と財政基盤強化を図る狙いだ。

年貢収入以外の財源確保も重要だった。その重要な柱となったのが金山開発だ。駿河では氏親・氏輝の時代から大井川上流などで砂金採取による金の生産が進められていたが、ちょうどその頃、



海外から灰吹き法という新しい産金技術が日本に伝わってきた。灰吹き法は金や銀を鉱石から鉛に溶け込ませたうえで鉛を酸化させて金や銀を取り出す技術で、当時としては画期的だった。

義元はこの技術をいち早く導入し、既存の金山をはじめ、新たに開発した富士金山（富士山麓西方の駿河側）で金の生産を飛躍的に増加させた。最先端技術導入と技術革新によって生産性を一気に向上させたのだ。

また領内を通る東海道は以前から物資の運搬が盛んだったが、特に甲相駿三国同盟が締結されてから一段と活発化した。義元は特産品の京都への輸出など交易を奨励し、街道の一定間隔ごとに馬と人員を配置する伝馬制を整備した。

今川氏の本拠地である駿府では、商人たちに諸役免除の特権を与えるなど保護した。駿府は大いに栄え、東日本最大級の大都市となった。

これらの特徴は、①金山の存在や東海道など、自前の資源や地政学的優位性を最大限に活かす②商品経済の発達という時代の変化を取り込む③新技術導入によるイノベーション——など。これにより、経営基盤の強化と成長戦略の推進を図り、業績を伸ばしたわけだ。

義元を支えた太原雪斎 優れた補佐役は経営安定の要諦

もう一つ見逃せないのが義元の補佐役でありブレインだった太原雪斎の存在だ。雪斎は、義元が仏門に入った幼い頃から学問や教養などの養育係を務めた禅僧で、以後、生涯にわたり義元を支え

続けた。前述の花倉の乱では戦いの先頭に立って義元の家督相続に尽力したのをはじめ、武田との関係改善や甲相駿三国同盟の締結を主導、三河攻めでも義元の名代として陣頭指揮を執った。この時に今川氏の人質となった竹千代の養育にも力を尽くし影響を与えた。後に家康が天下統一を果たす礎を作ったとさえいえるほどである。

雪斎は内政面でも功績を残している。義元は父・氏親が制定した分国法「今川仮名目録」（三十三カ条）の追加二十一カ条を制定し、時代の変化に合わせて領内統治や軍役、訴訟などについて規定を改定した。今で言えば、コーポレート・ガバナンスのようなものだが、雪斎はこれにも貢献した。本欄ではこれまでも、優れた補佐役の重要性をたびたび指摘してきたが、まさに雪斎はその代表例だ。そのような雪斎を信頼して重用した義元もまた優れたトップだったと言えるだろう。

だが一五六〇年、桶狭間で無残な討死を遂げる。享年四十二。信長を見くびったせいなのか、油断したためか。雪斎はこの五年前にすでに亡くなっていた。この時も雪斎が健在だったなら、敗戦はなかったかもしれないなどと想像してしまう。

いずれにせよ、最後には結果を残すことが何よりも大事だということも歴史の教訓である。

岡田晃

(おかだ あきら)

一九七一年、慶應義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト(WBS)」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授、同特別招聘教授を経て特命教授。新刊「経済で読み解く昭和史」(PHP新書)。